

# 小麦粉粘土づくり

佐藤 寛子



「せんせーい、こむぎこねんどやろうー!」

今週に入って今日で、三日連続である。年長組のクッキー作りをさっかけにして、年少組（三歳児）で小麦粉粘土づくりを始めてみたのが、先週のこと。先週から数えてみたら、もう六、七回小麦粉粘土をつくっている。子どもたちのやりたい気持ちちは分かるが、準備があるし、場所もとるし、何より終わってからの掃除が大変。

「今日は、お天気がいいわよ。お外で遊ぶのも気持ちがいいんじゃないかな」などと、別の方向に誘ってみるが、

「じゃあさ、いそいでじゅんびして、こむぎこねんどしてから、そとであそぼうよ」

おっしゃるとおり。やるからには、楽しませよう、と私も心を決めて、机にビニールクロスをかけ、その上に大小いくつかのボールを置い

た。ボールの中に、適当な量の小麦粉を入れていくと、かわいい手があちこちからいくつも伸びてきて、さらさらの小麦粉をさわる。

「きもちいいー」

そこへ、今度は水をそそぐ。これもまた量は適当。

「うわー手にくっついてくるー」と、大騒ぎ。

どろどろの小麦粉の固まりが、手のひらや指のまわりに、しっこくくっつき、かわいらしい小さい手は見る見るうちにもとの大きさの一・五倍くらいになる。初めての時には、この時点でギブアップする人が何人かいた。必死になって手を洗い、しっこい小麦粉の固まりをたわしでこすつてとろうとするが、なかなか落ちない。しかし今日のメンバーは、その辺のことは何度も経験を経積み、心得ているようだ。

「せんせい、おみず、もうちょつといれたほうが

いいよ」とか、

「みずいれすぎー。こな、こな！」などと注文が多い。

小麦粉と水の量に納得すると、黙々とこね始める。ボールのへりを使って、こねる人。ボールの底にたたきつけて混ぜ合わせる人。おにぎりを握るように、両手でこねていく人。こね方はさまざまだが、もとの大きさがわからないくらいに子どもたちの手を覆っていたしっこい小麦粉の固まりは、いつしか気持ちのいい柔らかさの小麦粉粘土へと姿を変え、子どもたちの手を離れていく。

「まほうのこな」と呼ばれている食紅を入れ、もう少しこねると、小麦粉色の粘土は淡いピンクや黄色やグリーンにそまる。ここまでですと、きれいに丸めてビニール袋に入れたり、薄くのばして、型抜きをし、スチームの上のせて乾かしたりして、小麦粉粘土づくりは終結となる。

\*

子どもたちは、気に入った遊びを何度も繰り返す。繰り返される遊びには、子どもの心をくすぐる楽しさがたくさんあるのだろう。そして、その楽しさは、彼らが今抱えている課題をクリアーにしていく原動力になっているような気がするのである。

小麦粉粘土に熱中するメンバーをよくよく考えてみると、人との距離の取り方に難しさを抱えている人が多い。仲良しの友達と一緒にいることへの安心感と、自分の気持ちを出せずにいることへのもどかしさの間で揺れている人。登、降園の時、母親とリズムが合わずに、決まって駄々をこねている人など。

さらさらだった小麦粉が水を入れることで、どろっとした固まりになり、自分の手にまとわりつ

く。けれど、小麦粉と水の量の割合を適度にし、あきらめずにこねつづけていくと、しつこく手に負えなかった小麦粉の固まりは、さわると気持ちのいい柔らかなさの小麦粉粘土になり、手からきれいに離れるようになる。

人との距離感は、近づいてみないとわからない。近づけば、自分とは違う相手のリズムや思いに触れ、戸惑うこともあるだろう。こねるといいう行為は、出会ってから、相手を知っていくための大事なプロセスのひとつだと考えられないだろうか。適度な量の水と小麦粉の出会いが小麦粉粘土を生み出すように、自分の思いや相手の思いの出し方にも適度な量というのがある。こねるといいう行為を重ねる中で、子どもたちは、そうした適度



な量を自分の手で、からだで学んでいる。

小麦粉粘土づくりを終えた後の、こぼれた小麦粉でいっぱいの机や床、簡単にはきれいにならないだろうと予想されるボールを見て、少しだけた

め息が出そうになるが、元気に外へ飛び出していった子どもたちを見送る時、「またやってもいいな」とそんな気持ちにいつもなるのだ。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## 「こねる」授業の面白さ

清水真由美

高校で家庭科を教えています。私が扱った「こねる」ことを行う授業を紹介したいと思います。一つは「こねる」という行為を実際に行う調理実

習の例を。もう一つは思考的にあれこれ「こねまわす」デイベートの授業について触れたいと思います。